

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

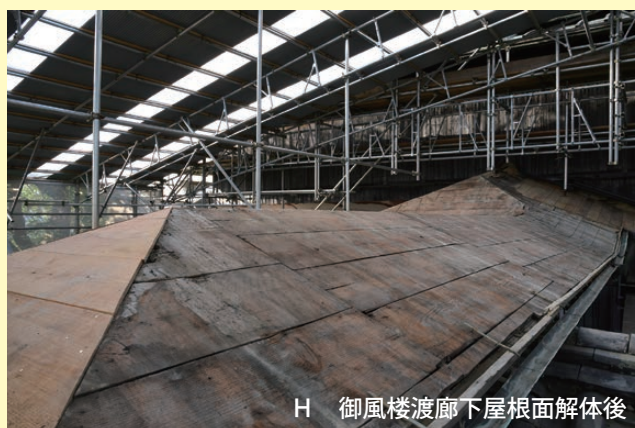
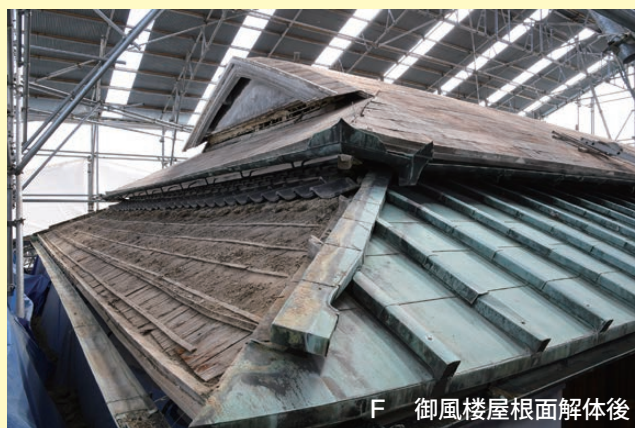
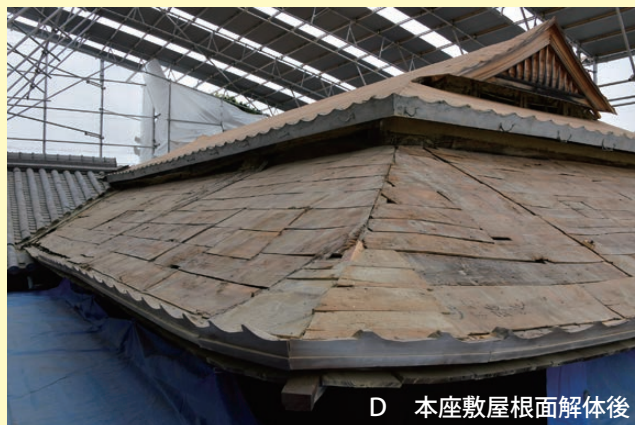
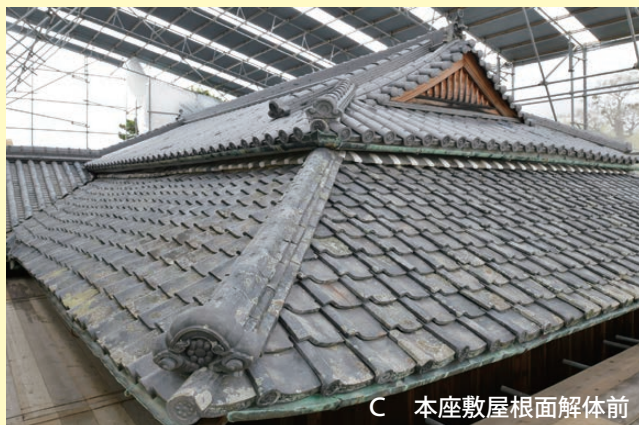
文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2026 秋号

114

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 重要文化財 濱口家住宅の保存修理 (1)



特集 重要文化財 濱口家住宅の保存修理 (1)

事業の概要と令和7年度の工事について

有田郡広川町に所在する重要文化財・濱口家住宅では、令和七年六月から保存修理工事を進めています。事業期間は約10年間を予定しており、現在は主屋・本座敷・御風楼の主要3棟の修理を行っています。建造物や事業の概要については風車110号に掲載していますので、併せてご覧ください。

令和7年度は、建物全体を覆う素屋根の建設を行いました。建設前には、敷地東面



写真1 素屋根の組立が完了した状況
(北東より見る)



写真2 瓦の解体状況（御風楼3階南面）
瓦をめくりながら金槌でたたき、瓦が割れているか確認をしています。割れていない瓦は高い音、割れている瓦は低く鈍い音がなります。



写真3 葺土の解体状況（御風楼南角屋西面）

状態の良い葺土については、練り直したうえで再用する予定です。

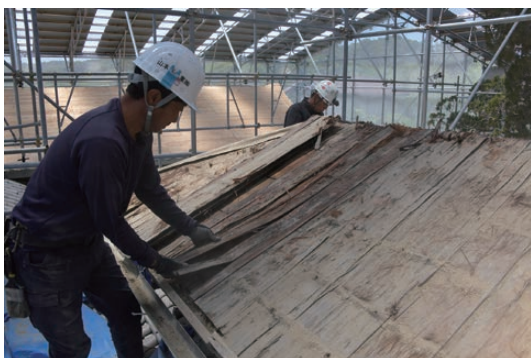


写真4 下地（杉皮）の解体状況（渡廊下東面）

葺土の下には、防水のために杉皮やルーフィングが敷かれていました。再用を想定し、部材を傷めないように丁寧に取り外しました。

北方の煉瓦塀（写真1手前）を一部解体し、敷地内の樹木の移植を行い、工事中の資材の搬出入口を確保しました。また、素屋根外周の搬出入口との取り合いを考慮し、本座敷と御風楼の庭境にある煉瓦塀に取りつく木製門扉と新蔵の底を先行解体したほか、樹木の剪定を行いました。そのほかに、建物の耐震性を解析に必要な補強を計画する目的で、敷地内の地盤状況を把握するためにボーリング調査を行いました。

瓦解体工事について

今年度から約3か月をかけて、3棟の屋根面の解体工事を行いました。解体は棟積、地瓦（棧瓦・丸瓦・平瓦）、葺土、下地の順に、瓦を葺く順番とは逆の手順で進めました。健全な瓦は再用するため、一枚ずつ目視や打音検査による確認を行い、再び葺くことができる瓦を選別していききました（写真2）。その後、種類・寸法ごとに分類作業を行い、水洗い後に屋敷地近隣の町有地に設営した保管小屋に格納しました。解体工事中には、破損状況の記録のほか、各棟における改造や修理といった変遷を整理するために、屋根面の仕様について調査を行いました。本特集では、葺かれていた瓦や下地の種類について、建物ごとに紹介します。

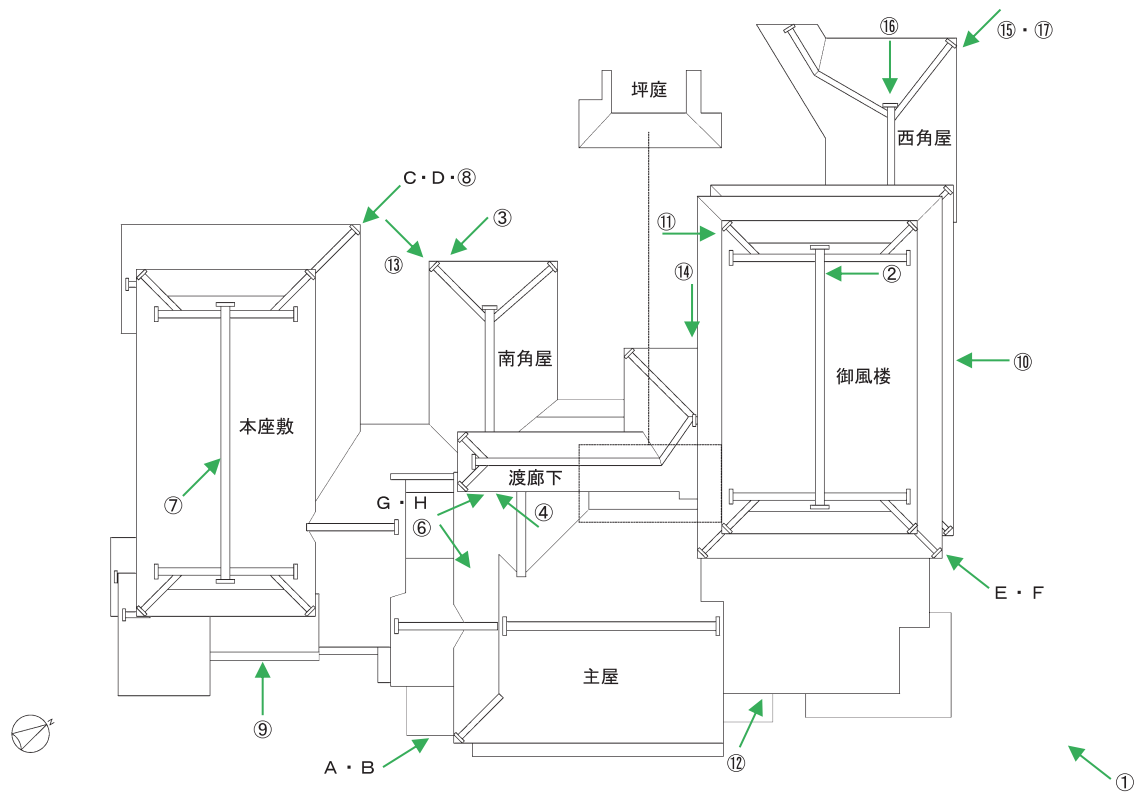


図1 濱口家住宅（主屋・本座敷・御風楼）屋根伏図および写真撮影位置図



写真6 主屋 野地の状況（南面西側）

平成24年度の屋根葺替は、既存の土居葺を残した状態で施工しています。今回の解体により、当時存置した土居葺が現れ、南側の本座敷六畳（写真右上）と一連の施工であることが確認できました。西側（写真左側）の野地は下葺を用いない羽重ね張りとしていました。



写真5 主屋 軒平瓦の分類状況

写真は、主屋東面に葺かれていた軒平瓦を分類した状況です。この面には瓦当（瓦の先端部分）に見られる文様が9種類ありました。

(1) 主屋

宝永四年（1707）の地震後に再建されたと伝わる主屋の屋根は、葺土の上に丸瓦と平瓦を並べた「本瓦葺」で葺かれています。明治、昭和、平成と繰り返されてきた修理ごとに、主屋北側と南側に続く本瓦葺にも用いられていた再用可能な近世期や明治期の瓦へ新たに補足した瓦を加えながら葺き直されています。葺土の下は土居葺が中心で、野地は板どうしを突き付ける張り方となっていました。また、西側の渡廊下に接続する屋根の野地は板の端を段々に重ねる張り方となっていました。雨仕舞を考慮するのなら上の板が下の板の先端に重ねる張り方となりますが、ここでは葺土のずれ止めを考慮したと考えられる、上の板が下の板の下端に重なる逆勝手の仕様が確認できました（写真6）。この仕様は、本座敷南東の張出部分、御風楼1階東面や角屋、敷地北側の新蔵（明治三十年（1897）頃建立）南面の底などに見られるほか、有田地方の伝統的な建物では一般的な仕様となっています。

(2) 本座敷

文化年間（1804～1818）に建立された本座敷は、本屋根、玄関、六畳、南西の張出部分を本瓦葺、北・西・東の3面の庇、南東の張出部分を棧瓦葺とします。平成十九年（2007）に本屋根の全面葺替、平成三十年（2018）に台風被害に伴う西面庇の葺替えが行われました。縁や玄関南側では、葺土の下に木表^{きおもて}使い（樹皮側が上向き）の杉皮が敷かれており、南東では昭和戦後期の葺替で施工されたと考えられる金属板の下地も確認できました。縁まわりの軒棧瓦には、濱口家の家紋である「九曜紋^{くようもん}」があしらわれています（写真9）。



写真7 本座敷本屋根 瓦の解体状況（南面）

本屋根の平瓦は、土を用いない「空葺^{からぶき}」で葺かれており、ステンレス製の釘で角材の瓦棧に留めていました。野地の上にはルーフィングも敷かれていました。



写真8 本座敷北西縁庇 葺土解体後の状況（北西より見る）

北縁庇（写真左側）では、野地の上に杉皮が敷かれています。西縁庇（写真右側）では杉皮の破損が著しかったため、平成30年の修理時にルーフィングに敷替をしています。



写真11 瓦の解体状況（御風楼3階南西隅）

雨や塩分を含んだ風が瓦の隙間に入り、瓦が重なる部分では塩害が発生し、風化が進んでいました。葺土上の白い粉も、瓦の風化によるものです。葺土は厚く、苧^{すさ}（藁などを含む）の多い良質なものが葺かれていました。



写真12 御風楼1階東面 野地の状況

平成24年の修理では、羽重ね張りに増し張りを行い、屋根面を平滑にしてルーフィングを敷き込む納まりとしています。

(3) 御風楼

明治時代末期（1909頃）に建立された御風楼は、3階の本屋根、2階北面庇を棧瓦葺とし、棧^{みつけ}の見付に角をもたない「丸棧瓦^{まるざんがわ}」が葺かれていました（写真10）。丸棧瓦は和歌山県内や九州の一部にしか使われていない地域固有の特徴をもった瓦ですが、御風楼の丸棧瓦には泉州谷川（現在の大阪府泉南郡岬町谷川）の「谷川瓦株式会社」の刻印が認められました。3階は棟を除いて建立当初の仕様を残しており、葺土の下には木裏^{きうら}使い（樹皮側が下向き）の杉皮が敷かれています。土留^{どどめざん}棧は3階の上屋には割竹、それ以外には角材を用いており、仕様が少し異なります。



写真9 棧瓦（本座敷東縁庇）



写真10 丸棧瓦（御風楼2階北面庇）

ます。1階東面の本瓦葺の屋根は、台風被害を受けたため、平成二十四年（2012）に葺替を行い、北側に近世期や明治期の瓦を集め、南側に新しい瓦を補足しました。



写真13 渡廊下・南角屋の屋根面（解体前）
（南西より見る）

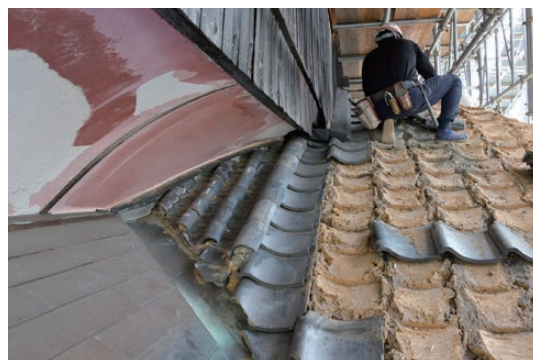


写真14 渡廊下北側三畳 瓦の解体状況
（西より見る）

壁際は小瓦を用いた本瓦葺、西面と南面は昭和戦後期以降の丸棧瓦で葺かれていました。



写真15 西角屋の屋根面（解体前）（北西より見る）

平成30年には南西側（写真右側）において、応急的な修理として棟積の積み直しや規格品の棧瓦を用いた葺替を行いました。



写真17 西角屋野地の状況
（北西より見る）

野地は上の板が下の板の下端に重なる逆勝手の仕様とします。平成30年には同じ仕様を踏襲して部分的に張替を行いました。

（４）御風楼渡廊下・南角屋

御風楼の南側に続く渡廊下では、平成30年（2018）に台風被害を受けたため、南側を中心に野地や下葺の補修、瓦の葺替を行いました。御風楼2階や3階と同じ丸棧瓦で葺かれています。一部には小瓦を用いた本瓦葺とした部分も確認できます（写真14）。

主屋の西側に張り出した南角屋は、主屋建立から現在に至るまで、風呂や便所といった水回りの機能を有する部屋で構成されています。近年には軒まわりを含めた屋根面の修理が行われており、棟の雁振瓦^{がんどりかわら}を引き付けるために内部に埋められた塩化ビニル管の製造年より、平成二年頃（1990頃）の施工であることが確認できました。

（５）御風楼西角屋

御風楼1階西面に張り出した角屋も、水回りの機能を持つ部屋で構成されています。また、平成三十年（2018）の台風で屋根の一部が崩落したことを受けて、小屋組・野地・瓦などの補修も行われてきています。屋根面は修理時の補足瓦を除いて丸棧瓦を用いた棧瓦葺としますが、御風楼2階や3階の「九曜紋」があしらわれた軒瓦ではなく、紋様をあらわさない軒瓦が葺かれていました。解体では、平成前期頃に行われた大棟の部分的な積み直しや南北の屋根面の地瓦の挿し直しも確認できました。



写真16 西角屋大棟の解体状況
（西より見る）

大棟の中央では、積み直しに伴い、塩化ビニル管が埋め込まれていました。

今後の工事について

令和8年度の前半は、屋根面の解体のほか、内部の建具や畳の搬出を行いました。今後は3棟の小屋組や床組といった木部の分解を中心に工事を進めていきます。屋根面だけでなく室内における建物の変遷について、今後の特集で紹介できればと思います。

（野田 達志）



大学生向け「出土遺物整理体験プログラム」開催!!

和歌山県には考古学や文化財を専門とする学科を有する大学がなく、考古学を専攻する大学生が県内にはいないため、大学生との関係をいかに築いていくかが当センターの課題となっていました。そこで、昨年度から大学生向けのイベントとして「出土遺物整理体験プログラム〜埋蔵文化財専門職を目指す大学生向け短期職場体験〜」を開催しています。今年度は第2回目で、8月5日〜7日の3日間で開催することにしました。

第1日目は午前中に整理作業の概要説明をした後、遺物の注記作業を体験してもらいま

した。昨年度は遺物の水洗作業から始めましたが、今年度は水洗する遺物がなかったため、注記作業からです。午後は、陶磁器の接合作業と軒丸瓦の拓本作業。第2日目は午前中に石膏を用いた土師器の鉢や高杯の補強・復元作業。午後は、遺物の実測作業。磁器碗と陶器碗を実測しました。第3日目は午前中に遺物の写真撮影作業と撮影した遺物写真のデジタル現像作業。午後は、イラスト編集ソフトを使用したデジタルトレース作業。実測図のトレース作業とともにスキャンした拓本の貼りこみもしました。午後のメニューは少し時間が余ったので、再び遺物の実測作業。初日に拓本をとった軒丸瓦の実測です。

組織によっても整理作業の手順や方法が

違ったり、最近はデジタル技術の導入によって作業効率が高められていたりしていますが、この3日間で従来行われてきた基本的な整理作業を一通り経験できたと思います。とはいえ、初めて取り組んだ作業も多かったようで、完全に習得できたとはいえないと思いますが、それでも一度体験したことは今後に生きてくると思います。

最後に参加者からのアンケートを紹介します。「新しいことが学べて楽しかった。」「作業場がどんな雰囲気か分かって良かった。」「改めて自分の専門分野を考える機会ができた。」来年度以降も同様の企画を続けていきたいと思っていますので、興味を持たれた大学生がいましたら来年お待ちしております。

(仲原 知之)



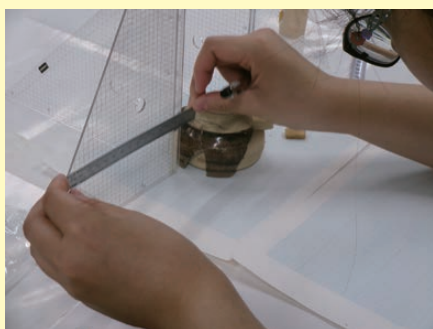
接合体験



拓本体験



補強・復元体験



実測体験



写真撮影体験

文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物(13)

当課では、令和七年度から十年計画の事業に着手した、広川町にある重要文化財・濱口家住宅の保存修理に携わっています(施工の様子は本号の特集記事を参照ください)。

濱口家の系譜を遡ると、在田・廣村(現在の広川町)にある、安楽寺という十五世紀開創のお寺に辿り着きます。江戸時代中期以降は関東へ進出し、銚子(千葉県)で「西濱口(儀兵衛)家」が醸造した醤油などを「東濱口(吉右衛門)家」が江戸・日本橋で販売していました。両家ともに出身である廣村とを行き来しながら商売を行いました。それぞれが地元で構えた屋敷が、東濱口家住宅(現在保存修理工事中の濱口家住宅)、西濱口家住宅(現在の屋敷地は主屋などを一部残して防災学習施設「稲むらの火の館」が存在)になります。東濱口家の現在の屋敷地は一七〇七年の宝永地震後の津浪(波)の影響を受けて移されたといわれ、敷地内で最も古い建物である主屋も地震以降の再建と考えられています。

現在工事中の主屋・本座敷・御風樓の三棟では、二万七千点ほどの瓦を屋根から降ろしました。主屋の屋根は、明治四十年代に御風樓が新築された際に全て葺き替えられており、以降も昭和・平成と維持修理が繰り返されて来ています。その一部で百年以上前の状態をそのまま保った部分があり、そこでは特徴的な瓦を目の当たりにしました。まずは十七世紀中頃の製法とみられる軒丸瓦一点、それよりも五十年以上古い製法の平瓦一点、そして表裏全面を「ケズリ」の様な強いナデ仕上げとした平瓦一点です。この軒丸瓦に対応する丸瓦は数十点が確認でき、また、それと同時期の製作と考えられる平瓦・軒平瓦もある程度の数量が確認されるので、宝永地震以前の建物由来の瓦である可能性が考えられました。それでも残る平瓦二点の存在はナゾなままです。

そこで、主屋の軒丸瓦の瓦当紋様に着目しました。江戸時代中盤の製作と考えられる瓦は、三ツ巴紋の周りに十二個の珠紋を配したのですが、一点だけ現存する古い軒丸瓦の珠紋は九個です。一方、明治後期に新調された軒棧瓦には、その珠紋だけを抽出した様な「九曜紋」が遇われます。九曜紋は現在も東・西濱口家の家紋、またその檀那寺である安楽寺の寺紋です。このあたりからも探索できないものか、と思索してみています。

江戸時代から主屋の屋根を守り続けてきた瓦たち。およそ百二十年前の施工時の当主である九代・濱口吉右衛門を始め、歴代の当主たちの建物にこめた思いに対し、現時点ではナゾなままの平瓦二点が有するメッセージからもより迫っていくことができるかもしれない。そうした期待を抱きながら、今後の修理に臨んでいけたらと思っています。

(下津 健太郎)

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

埋蔵文化財課 あなたのスマホから全国の遺跡にアクセス!

発掘調査報告書(遺跡の調査成果をまとめた本)をみなさんのスマートフォンやパソコンで見ることができるといえることを知っていますか? 発掘調査報告書は地域の図書館や各自治体の教育委員会などで閲覧することができ、発行部数が限られていることなどもあり、全国の発掘調査報告書すべてが皆さんのお近くにある図書館で閲覧できるとは限りません。遠方にある遺跡に興味を持って、資料となる報告書を閲覧できるところが近くにない——そんな不便を解消するのが「全国文化財総覧」です。

これは、文化財の調査報告書を全文電子化して、インターネット上で検索・閲覧できるようにしたもので、現在は独立行政法人奈良文化財研究所が運用しています。当初は調査報告書のみでしたが、現在では全国の文化財に関連したイベント告知や現地説明会などの動画の閲覧も可能になっています。

当センターもこの全国文化財総覧に参加しており、令和8年3月末にこれまで発行した全ての発掘調査報告書をネット上で閲覧できるようにしました。今後も全国文化財総覧を通じて全国に和歌山県の文化財の魅力を発信していきます。

(濱崎 範子)



全国文化財総覧: <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報（2026年秋～2026年冬）

和歌山県立博物館

- 企画展「くらひらく ―博物館の蔵仕事事例集―」 2026年10月10日（土）～12月6日（日）
- 企画展「海南の古刹 願成寺」 2026年12月19日（土）～2027年2月14日（日）

和歌山市立博物館

- 特別展「川合小梅の世界 ―時代を記し、日々を描く―」 2026年10月31日（土）～12月6日（日）

わかやま歴史館

- 夏の企画展「和歌山城と豊臣政権」 後期 2026年9月18日（金）～10月26日（月）

有田市郷土資料館

- 市制施行70周年記念特別展「有田市指定の文化財 ―未来へ伝える宝たち―」
2026年9月19日（土）～11月23日（月・祝）

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 令和7年度末（2026年3月31日）をもって、紀伊風土記の丘資料館は一時休館し、
令和10年（2028）和歌山県立考古民俗博物館（仮称）としてリニューアルオープンします。

（公財）和歌山県文化財センター

- 速報展「和歌山県内文化財調査成果展 ―紀州のあゆみ2026―」【会場：橋本市郷土資料館】
2026年10月10日（土）～12月13日（日）
- 地宝のひびき ―和歌山県内文化財調査報告会2026【会場：橋本市郷土資料館】
2026年10月31日（土）13時00分～16時50分
事前申込：9月28日（月）～電話による受付 TEL 073-472-3710（平日のみ）

※掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 重要文化財 濱口家住宅 屋根面解体前・解体後の状況
- 2 特集「重要文化財 濱口家住宅の保存修理（1）」
- 6 短信「大学生向け『出土遺物整理体験プログラム』開催!!」
- 7 きのかに歴史小話「文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物（13）」
「埋蔵文化財課 あなたのスマホから全国の遺跡にアクセス！」
- 8 催し物案内

風車114（2026・秋号）

令和8年9月30日

（公財）和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

（公財）和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
E-mail kanri-2@wabunse.or.jp



ホームページ



YouTube



WABUNSE_OFFICIAL
Instagram